2014年（平成26年）3月20日（木曜日）
山形新聞

いしゃ先生

町おこし映画顛末記 ▶⑬

あべ 美佳

ピッチピチ 助っ人参戦

若い人の参加を切望してきた「志田周子の生涯を銀幕に甦らせる会」。ここへきて強力な、ピッチピチの助っ人が現れた。東北文教大短期大学部の土居洋平准教授率いる学生さんたちだ。

彼らはフィールドワークで西川町の大井沢を度々訪れている。志田周子をはじめとした先人たちの生き方、当時の暮らし、文化を学び、我々のプロジェクトに協力を申し出てくださった。周子先生が詠んだ四季折々の短歌を自分たちで解釈し、選び、手作りのブックレットも作ってくれた。今、映画製作の募金をしてくれた方々に感謝の気持ちとしてお配りしている。いやぁ、ありがとさまね。私は皆に会いたくなって、先日、学校までお邪魔した。見た目もハートも、なんとめんこい学生さんたちだっけ。

短歌のブックレットを制作するにあたり、彼らは班ごとに分かれて、当時、志田周子と関わりのあった方々にインタビューをしている。周子先生の助手（今でいう看護師）の役目をしていた方、周子先生が校医を務めていた大井沢小中学校で同時期に教師をやっていた方、歌会仲間だった方……などなど。19、20歳の学生さんに、志田周子の生きざまはどう映ったんだべね。私はこんな質問をしてみた。「皆は、周子先生を可哀そうな人だと思いますか？」

彼らの答えはこうだった。「可哀そうだとは思いません。本当に大変な人生だったとは思うけど」……自分だったら耐えられるかどうか自信がない。周子先生は命を懸けられる仕事をしているという誇りがあったのではないか。

大井沢の人のことが好きだなと思えたから、あそこまで頑張れたのではないか、もしも同じ時代に生きていたら友達になれたかなぁ……彼らはそれぞれ、こんなふうに答えてくれた。私は心底うれしかった。若い人たちの目に映る「いしゃ先生」は決して可哀そうな人ではない。凛として誇り高く、自分の人生を自分で選び取った女性なのだ。

ひとつ、驚いたことがある。学生さんたちはただ今就職活動真っ最中なのだが、9割9分、地元・山形で就職したいと希望しているのだ。「地元が大好きなんです」「自然のない場所でなんて暮らせません」「親元からなるべく離れたくない」「お嫁に行くのも近所がいい」……あぁ、時代は本当に変わったもんだ。私がその年頃には、一刻も早く都会に出て行きたいと思っていたのに。私だけではない、周りもほとんどがそうだった。だって、本当の豊かさなんて知らなかったから。「こごらには何にもないがらなぁ」という大人の言葉を素直に信じていた。でも今なら分かる。「何にもない」の「何」って、ナンダベ？　コンビニが？　デパートが？　ほれより凄いものが故郷にはある、と。私が40過ぎてようやく行き着いた答えを、この子たちは半分の年数で知ってるんだなぁ。ないだて、こりゃこりゃ。

ただ、残念ながら、彼らの希望通りに就職できるかどうかは……かなり厳しいらしい。我が故郷は就職口が本当に少ないんだねぇ。おい！　いいんだが、大人たち！　もったいねぇなぁ。こんな良い若人、手放すことにならないようにすねば。我々のプロジェクトが成功すれば、ちょぺっとですが雇用にも役に立てるでしょう。映画は完成したら終わりじゃないからね。それこそ一生がかりで仕事は続くのです。んー、なんとか役に立ちでなぁ。

「西山にオリオン星座かかるをみつつ患家へ急ぐ雪路を踏みて」……学生たちが選んだ周子先生の代表作です。ロマンチストだね、いしゃ先生。そんな知られざる部分も、なるべくたくさんの人に知っていただけるよう、我々も頑張ります。空から、どぉが見守っていてけらっしゃい。

（脚本家・作家、尾花沢市出身）

＝月1回掲載します